

目次

ページ

都市計画研究会	第3回都市計画研究会	・ 景観法について / 陶山幸夫氏	1
	ひろしままちづくりフォーラム 2005	・ 自立地演”の街づくりを実現するための方策を考える -語り合い支え合い育てる 自らが立ち地域が演ずる街づくり-	3
講演会・シンポジウムの報告	アエル東ヶ丘住宅分譲地 記念シンポジウム	・ 官民一体による宅地分譲事業のモデル的手法	6
	団地再生シンポジウム	・ 団地再生は必要か、可能か / 住宅団地の現状と問題点を考える・(都市住宅学会中国・四国支部主催)	7
	都市計画サロン	・ 私のグリーンコモン論 / 吉村元男氏	8
	編集委員ホットコーナー《周藤編集委員》	・ ニューヨーク報告	10
	会員紹介《奥村 誠》《前田 眞》		12
	今後の活動計画		13
	編集後記		13

第3回都市計画研究会

平成17年2月5日 / 広島市民交流プラザ / 参加者30名

『景観法』について

陶山幸夫氏 国土交通省中国地方建政部計画・建設産業課
課長補佐

平成15年7月の美しい国づくり政策大綱の公表以降、景観に関する関心が高まっています。平成16年6月に公布、12月に政省令公布・施行された「景観法」に関して、国の関係部局から適切な説明を戴き活発な議論が行われました。



<講演の概要>

1. 景観法の必要性

全国で500弱の地方公共団体において自主条例として景観条例を制定するなど積極的に景観の整備・保全の取り組みが行われている。しかしながら共通の基本理念が未確立なことや届出勧告等の手法の問題、国の税・財政上の支援が不十分など現行での取り組みには限界がある。

「美しい国づくり政策大綱」、「観光立国行動計画」、「『都市景観の日』中央行事2003年宣言」など近年、景観に関する関心が高まりを見せている。

このような背景から、景観を正面から捉えた基本的な法制を整備し以下の内容を盛り込み、景観の意義やその整

備・保全の必要性を明確に位置付けるとともに、地方公共団体に対し、いざという場合の一定の強制力を付与することが必要という認識のもと景観法が定められた。

- ・ 景観を整備・保全するための基本理念の明確化
- ・ 国民・事業者・行政の責務の明確化
- ・ 景観形成のための行為規制の仕組みの創設
- ・ 景観形成のための支援処置の創設

2. 景観法の構成

基本理念

- ・ 良好な景観は現在及び将来における国民共通の資産
- ・ 良好な景観は適正な制限下の調和した土地利用が必要
- ・ 地域の個性を伸ばす多様な景観形成を図るべき
- ・ 景観形成は住民、事業者および地方公共団体の協働
- ・ 景観形成は保全のみならず新たな創出も含む責務

国...総合的な施策の策定・実施と普及啓発活動

地方公共団体...良好な景観形成に関する施策策定と実施

事業者...事業活動での良好な景観形成努力

住民...良好な景観形成に積極的な役割

景観計画

景観計画とは景観行政団体が景観行政を進める場として

定める基本的な計画

景観行政団体とは

やる気のある市町村が景観行政の担い手となる措置。政令市、中核市は自動的に景観行政団体となる。その他の市町村は都道府県と協議・同意による。

景観計画に定める事項

<必須事項>

- ・景観計画区域(都市計画区域外でも)
- ・景観計画区域における良好な景観の形成に関する方針
- ・良好な景観の形成のための行為の制限に関する事項
- ・景観重要建造物又は景観重要樹木の指定の方針

<選択事項>

- ・屋外広告物の表示及び屋外広告物を掲出する物件の設置に関する行為の制限に関する事項
- ・景観重要公共施設の整備に関する事項
- ・景観重要公共施設の占用等の基準
- ・景観農業振興地域整備計画の策定に関する基本的な事項
- ・自然公園法の特例

届出・勧告による緩やかな規制誘導を行う区域が景観計画区域であり、より積極的に良好な景観形成を誘導していきたい場合は景観地区(都市計画で定める)や準景観地区(都市計画区域外、準都市計画区域外で条例で定める)を設定することができる。

各種の支援制度等

景観協議会

住民・事業者と関係行政機関等とが協力して取り組む場であり、景観に関するルールづくりを行う。協議会での決定事項には尊重義務が発生する。

規制緩和による支援(建築基準法の特例)

- ・景観地区における斜線制限の適用除外
- ・景観重要建造物の外観保存等のための建築基準法上の制限の一部緩和

予算・税制による支援

- ・景観形成事業推進費(平成16年度創設)
- ・まちづくり交付金の拡充や関連補助事業の活用
- ・「住民参加型まちづくりファンド」の創設
- ・景観重要建造物等の相続税の適正評価

等
屋外広告物法との連携

屋外広告物法が一部改正され、板に直接塗装したはり札やプラスチック枠の立看板、広告旗も除去が可能になった。

<質疑とまとめ>

- ・現行の美観地区、風致地区はどういう位置づけになるのか 美観地区は景観法へ移行、風致地区はより強い位置づけとなる。
- ・景観計画区域を誰がどのように決めるのか 学識経験者等からなる審議会により決定される。
- ・条例をつくる基準はあるのか 国土交通省の雛形がある。
- ・美しい国土と美しいながら、今ある美しい景観が将来にわたって守られる保証がなくもっと国がリーダーシップを取るべきだ。(意見)

景観といってもその考え、捉え方は地方、地域によって多岐にわたっており、なかなか基準を決めていくのは難しいと考えられる。しかしながら景観法の施行により、今後、景観行政団体が増え、各地域の良好な景観が守られ、創られていくことを期待したい。(文責：安永洋一郎、隅田誠)



前半の静かな研究会の様子



質疑の熱い研究会の様子

ひろしままちづくりフォーラム2005

自立地演”の街づくりを実現するための方策を考える 語り合い支え合い育てる 自らが立ち地域が演ずる街づくり

日時：2005年1月15日(土) 13:00~17:30

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ

主催：ひろしま まちづくりフォーラム実行委員会

(当学会を含む8団体で構成)

後援：国土交通省中国地方整備局 広島市 中国新聞社
ほか4団体

総合司会：	佐伯達郎(建設コンサルタンツ協会中国支部)
開会挨拶：	加藤文教(日本都市計画学会中国四国支部)
問題提起：	福田由美子(広島工業大学助教授)
車座会議	
話し手：	岩田幸二(都市住宅学会中国・四国支部)
	細見 恵(広島県建築士会広島支部)
	松田智仁(日本建築学会中国支部)
	宮迫勇次(建設コンサルタンツ協会中国支部)
進行役：	山下和也(日本都市計画学会中国四国支部)
閉会挨拶：	三島久範(実行委員長：広島県建築士会広島支部)



【フォーラムの背景と概要】加藤文教氏の開会挨拶より

このフォーラムは、2001年から隔年で開催しており、今回で3回目ということになります。

第1回目では、アメリカで30年に渡ってコミュニティ・デザインに取り組んでこられてきた、ランディー・ヘスター教授をお迎えし、市民・行政・専門家が協力して築き上げるまちづくりの姿について議論いたしました。ここでは、人間の利害関係を読み解き、そこで誰がキーパーソンなのかというものを描いた「パワーマップ」というものが、合意形成、あるいは問題解決において有効であることを学びました。

第2回目では、「持続するまちづくりの新たなシステムを考える」をテーマに掲げ、「新しい公共」の提唱者である林泰義氏を迎え、ピッツバーグの事例などを交えた基調講演とともに、活動団体の方などからまちづくり活動の障壁を中心とした話題提供をしていただきました。その後、参加者160人が1つのテーブルで議論するという、「100人ワークショップ」を通じ、課題解決に向けた「3本の矢マップ=協働の図」というものを作成いたしました。ここでは、プラットフォームや中立的な立場で活動を支援する組織の構築ということがキーポイントであることを導き出しました。

そうした展開を受け3回目となる今回は、まちづくりの対象をエリアコミュニティや、そのフィールドといった地域の街づくりに焦点を当て、自立地演の街づくりを実現するための方策について、より具体的に考えました。

ここでは、現状における様々な問題点や悩み、課題、さらには可能性や希望を出し合いながら、現状の活動を地域自らが自立し、演じ、持続できる活動へと進化させていく取り組みや、推進方法について議論しました。とりわけ、プラットフォームや協働活動の支援組織の大切さや内容の認識と同時に、プラットフォームをより現実的なものとしてイメージし、共有するきっかけになったといえ、ムーブメントの予感を感じさせるものでした。

【課題提起】

さらに、この議論は懇親会へと持ち込まれ、ホワイトボードを用いた白熱したバトルが展開されました。

(懇親会でのバトルについては、この後をご覧ください。)

“自立地演”の街づくりに必要な仕組みとは
福田由美子氏(広島工業大学 助教授)



街とは生活する場所のことです。その生活を支える道路などの構造物は行政がつくり、市民や企業が使うといった一義的、固定的関係、いわば官による公共の独占構造といったものがありました。

しかし市民との協働無しには解決できない問題(教育、環境など)を解決するために、住民の地域への関わり方も模索され始めてきているのです。(和歌山県「秋津野塾」、スウェーデンで公共施設の運営を民間、NPO、行政が競いあう事例など)

市民自らがそれぞれの街のお世話をするといったことを実現できる時期にきたと言えるのですが、いったい誰がどこまでの面倒をみるのかとか、みんなで「公共」を担う難しさもでてきます。「公共」とは社会一般で使う空間のことで顔が見えない範囲を含み、無関心を生みだしますが、「共空間」という共に使う空間、場所では、顔が見える範囲で一定の秩序、愛着といったものを生みだします。誰のものでもない無関心でいるのではなく、それぞれが自分

のものと考え愛着をもてるような「公共」の捉え方が求められてきています。魅力ある地域環境の生成を実現するためには、個人を基盤にした「新しい公共」と、それを支える街のプラットフォームといったものが必要となってきました。誰がどのようにパートナーシップを組み、どうやってプラットフォームをつくるのか。街のヴィジョンをどう共有し、維持し循環するのかなど考える必要があります。公共性の保証、公益の解釈、技術的バックアップ、活動・事業の評価を新たなシステムとしてどう実現するのが今後の課題だと言えます。

【車座会議 - 1】課題と活動紹介

“自立地演”の街づくりに向けたひろしまの課題

松田智仁氏(日本建築学会中国支部)

広島では、アジア競技大会を支えた市民ボランティア、道の駅に関わる活動など、10年前から様々なまちづくり活動が始まり、道の駅については広島発といえ、国の施策に組み入れられ全国展開しています。平和文化、路面電車等のテーマコミュニティは活動もサポートも充実しています。一方で、なかなか意義の共有や参加の広がりを得ることができない、いささか疲れの見える状況もみられます。リーダー不在や高齢化による活動停滞、専門家が支えるが勉強会どまりで自立できない、地域でも合意できなかったといったまちづくり活動の課題も浮上しています。

まちづくりをサポートする体制をみると、まちづくり市民交流プラザができ、広島NPOセンターがあり、行政もあり、様々な活動を支援しています。しかし、活動の初期の段階、例えばマンション建設にどう対応するかなどについては、アドバイスしてくれるところが十分でないなど、支援体制が抜けている部分もあります。また、町内会などエリアコミュニティに関する活動とサポートは低迷しており、この領域の支援も大きな課題のひとつとなっています。

佐東地区まちづくり協議会による人にやさしいまちを目指した「(仮称)駅前サロン計画」

岩田幸二氏(都市住宅学会中国・四国支部)

高齢者や足の不自由な方が、買い物や散策など安心してまちに出られるようにする目的で、電動スクーターを無料で貸し出すタウンモビリティの施設を設ける計画です。

「佐東地区まちづくり協議会」では「タウンモビリティ導入検討会」を立ち上げ、ワークショップでまちの情報発信や雑談ができる気楽に立ち寄れる施設にしたいという要望があり、その方向で検討を進めています。市有地である敷地を借り受けるため、公益の確保やNPO法人化など問題解決に取り組みながら、協力いただいている他団体(タウンモビリティ楽会、大学、行政など)との連携を図るための情報提供を積極的に行っています。

NPO法人化の検討の際には、この協議会が自立して活動していけるよう、体制を見直すための絶好のチャンスではないかと思っています。今までは、市のほうが事

務局を担っていましたが、これからは地元で行い、自立地演を進めていける体制にしていく必要があると考えています。

コイン通りの街づくり

細見恵氏(広島県建築士会広島支部)

コイン通りは、それまで五日市中央通りだとか産業通りと呼ばれていたところが、平成元年に造幣局にちなんで命名されたものです。コイン通り自体も乱雑で統一感のない町並みとか、不法駐車・駐輪、それから車の渋滞、駐車場不足といった問題を抱えていました。

今までのまちづくり活動は、大きく4つに区分できますが、当初、商店街のCI策定からスタートしました。キャッチフレーズなどを試す中で、カラー舗装や街路灯、ハナミズキやアズノの植栽が具体化し、活動を発展させてきました。評価できる点としては、住民主体の活動が軌道にのっていること。それから、多種多様な人材が集まっているにもかかわらず、全体としては一つにまとまっているということ。コイン通りを取り巻く地域の街づくりに関心を持ち、責任感を共有する住民や商店者、行政、大学研究者、専門家たちが自主的に集まり様々に意見を出しながら実現していく、起動力を持つ街づくり活動でもあります。

今後の課題として、コイン通りの景観形成を目指した街づくり協定という出発点から離れてしまっているため、街づくりの方向性の再確認が必要なことと、事務局機能の定着化といった組織体制の強化があげられます。

子どもと学生が紡ぐ地域の未来

宮迫勇次氏(建設コンサルタント協会中国支部)

鳥取市の振興住宅市街地と湖山池が接する地域において、地域住民が連携して湖水の環境改善、自然環境保全活動が行われました。湖山池は日本で一番大きい池といわれ、万葉集にも出てくる歴史文化の地ですが、周辺地域の市街化が進行し、風土やや自然が危機に瀕していました。

こうした中、様々な活動が展開され、横断的な組織もつくられました。代表的な活動として鳥取大学の公開講座“楽しく学ぶ湖山池地域学”や近接小学校の“合同総合学習”があり、学生や小学生が中心となった活動が地域課題の壁を壊し、湖畔公園や水質保全事業などの行政参加型の取り組みに発展しました。

大学の研究室と漁協、郷土研究者を中心に、地域の子どもや学生、大人が共に学び、地域に共通の誇りと地域づくりの目標をもっています。地域固有の対立関係も解消に向かい、地域資源を大切に暮らしが歩みを始めました。

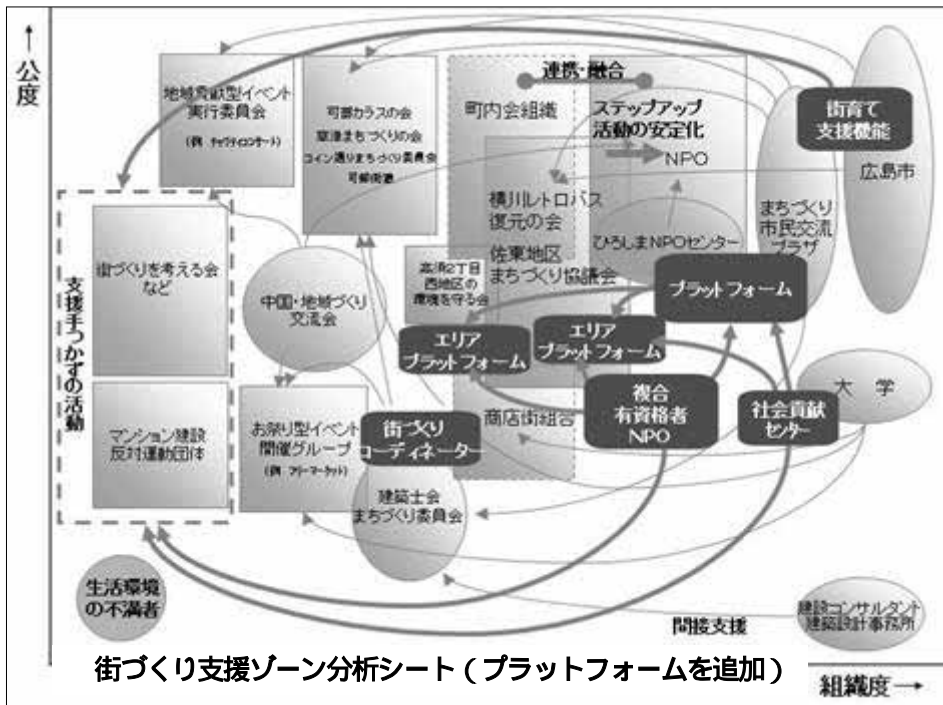
大学と大学生がコミュニティづくりとマネージメントを苦労しながら行ったのですが、中心人物である大学生2人が卒業し、活動リーダーが抜けたことで、個人や特定組織への依存しない地域コミュニティを継続的に支援するプラットフォームの必要性が課題と思われれます。

【車座会議 - 2】方策を考える

「市民はもっと多種多様」といった意見や「港町づくりの推進」といった要望、志民(市民) 共育(教育)といったキーワードも飛び交う白熱した中で、語り手からは議論を続けることと開かれていること、継続しやすい体制づくりが重要だというアドバイスがありました。

後半は「活動・事業の評価方法」の紹介と、ステージボードにある「街づくり支援ゾーン分析シート」上にプラットフォームを貼りつけながら、支援体制づくりの必要性や可能性について話し合い、シートを完成させました。

専門家が閉じていないか、問いかけながらチャレンジしたいという実行委員長の言葉でこのフォーラムを終了しました。



ひろしままちづくりフォーラム2005 第2部:懇親会 - 自立自演の大バトル討論会 -

前代未聞の大バトル討論会は、M氏が会場の倉庫スペースに白板があるのを見つけ、持ち出したことから始まった。

そこに、シンポジウムの時からフラストレーションの溜まっていたO氏が、行政、市民、企業の構造図を描き、「行政の守備範囲“公共”は、従来はここ(3者の重なった部分)で、これからの厳しい財政状況などを考えると、これを拡大して捉えるのは無理があるのではないか」と、ほぼ相手を特定したに等しい形で問題提起されました。

売られたケンカは買うのが筋(?)のF女史は、すぐさま反撃に出て、「(新しい)公共や公」について議論白熱。果たして、どちらが勝者になったかは、会場にいた皆さんの判断に任せますが、夫婦漫才のように感じたのは私だけでしょうか。

この両者のバトルから、マイクの取り合いとなり、皆さんが自立・自作そして自演の大スピーチ大会になり、“地”議論から“自ら”演ずる場になったのでした。しかし、多くは日頃おとなしい皆さん(一部、日頃から大きな声の人もいましたが)ですが、何かのきっかけで、こんなにも変身するのは驚かされました。

最後に、こんなに楽しく、全員参加の議論ができた、中身の濃い懇親会は初めてです。白板、恐るべし。



< “自ら”演ずる人々の一場面 >



まだ、沢山の方々が登場されました。失礼の段は、アルコールに免じてお許しください。(文責：第1部/富重法生さん(建築士会) 第2部/山下和也)

アエル東ヶ丘住宅分譲地記念シンポジウム

日時：2005年1月25日(火)13:00~17:00

場所：メルパルク岡山(岡山市内)

この特別記念講演及び記念シンポジウムは、岡山市・ハウスメーカー18社・NPO法人中国定期借地借家権推進機構が官民共同して、三位一体となり推し進めた分譲事業の売上を記念して行われたものである。

1、特別記念講演の概要(13:05~14:30)

『今年の内外景気とこれからの地域金融機関の役割』

講師：中国銀行 頭取 永島 旭氏

(1) 今年の内外経済について

日本経済の景気変動は、国内よりもむしろ国外からの影響の方が大きい。海外の景気動向に関しては、アメリカの企業方面が減税等により非常に好調なこと、及び、ベビーブーマー、ジェネレーションYと呼ばれる世帯が、これからのアメリカ景気を押し上げていくので、リスク要因はあるものの、アメリカ経済に関しては一部言われているような心配はない。中国経済に関しては、日本への影響が大きい。いくつかのリスク要因があり、成長は若干減速するが、これからも中国経済は伸びていくだろう。日本経済に関しては、景気は踊り場にあり、景気後退論ではなく、これから徐々に回復に向かってゆくだろう。その理由には、投資の国内回帰、団塊ジュニアの存在、日本人の貯蓄に関する意識の変化等がある。岡山県の経済に関しては、中国特需による一部地域における重厚長大産業の伸び、住宅産業の好調があった。



(2) これからの地域金融機関の役割について

これからの地域金融機関は、銀行業務として、融資業務の伸びは余り見込めないことから、証券仲介業務、ベンチャーファンド、ビジネスフィッティング等、ユーザーの様々なニーズに答えていくために、金融に関する様々なサービスを模索し、業務範囲を広げていくべきである。

2、シンポジウムの概要(14:55~16:55)

『官民一体による宅地分譲事業のモデル的手法』

コーディネーター：岡山大学副学長 千葉壽三氏

パネリスト：岡山市長 萩原誠司氏、岡山市都市整備局住宅整備課長 田尻久氏、積水ハウス岡山支店長 斉藤浩一氏、NPO法人中国定期借地借家権推進機構理事長・

アエル東ヶ丘共同分譲事業推進協議会会長 馬場勉氏

当初、『アエル東ヶ丘』の前に岡山市が行った分譲事業の販売不振から、売れるかどうか不安であった。市長のアドバイス、馬場会長のご助言、ハウスメーカーのご協力等により、最終的には成功することができた(田尻課長)。今回の定借約2割という販売状況は、日本人の、借りることよりも所有を

好むというメンタリティーが指摘できる(馬場会長)。今回は、定期借地権を売れ残りの区画に関して設定したのではなく、販売当初から導入したことが画期的(斉藤支店長)。

北斜面・墓地付近の区画が、確かに安い面もあったが意外にも早い段階で売れた(馬場会長)。近年の安心・安全志向により、山に囲まれた墓地の近くが早く売れたのでは。これからの都市計画は、このことも考慮に入れて、設計することが必要ではないか。(萩原市長)

定借に関しては、自治体が借金を持つことに対する総務省の難色が障害の一つだ。資金が回るのであれば、一概に借金を持つことも悪いとは言えない。プロジェクトを個別に評価する基準づくりが求められている。また、今回は底地の所有者が公共である安心感が成功の要因の一つ(萩原市長)。今回の主要な販売層は、35歳までの世帯が多い。団塊ジュニアが、住宅ローン減税の影響等により、親からの融資等が受けられ易かった。また、岡山市の新駅周辺の調整区域には、利便性は高いが、未開発の土地が残っている。これを開発し、定期借地権を導入するなり、官民一体となって、今回のような事業を行ったらどうか(斉藤支店長)。ただ留意点として、開発された結果、悪い地域から良い地域に人口が流出し、勝ち組み地域と負け組み地域を生む可能性がある。また、これからの時代は官民一体となり、まちづくりに関して、協力して事業を行っていくことが成功の秘訣であり、重要だといえる。今回、岡山市の担当者は、非常に積極的に動いた(馬場会長)。

今回の成功事例をぜひ全国発信して欲しい。また、定借の51年間の賃料一括前払いオプションは非常に面白い(会場意見)。これは岡山市長が提案した(田尻課長)。賃料の回収コストを考えると、一括して徴収した方が効率的だ(萩原市長)。定借分譲に対する銀行の融資制度創設に向けて努力した(馬場会長)。市長の話にもあったが、岡山市が政令指定都市として成長していくことにも関連して、これからのまちづくりに関して参考になるご意見が多く寄せられ、大変意義が大きかったと思う(千葉副学長)。

3、まとめ

今回の特別記念講演及び特別記念シンポジウムにおいては日本都市計画学会中国四国支部の助成を頂き、無事成功に終わることができた。来場者は約100人で、『アエル東ヶ丘』分譲事業に参画したメンバーの各代表者から、様々なご意見・ご提案があった。また、これからの岡山のまちづくりを考える上で、参考になるご意見も多数寄せられた。これからのまちづくりを考える上で、官民一体の成功事例として今回の分譲事業はモデルケースといえよう。これが他の自治体にも普及し、官と民がお互いに意見を出し合ってより良いまちづくりが実現するきっかけになればと思う。(文責：馬場勉)



団地の再生は必要か!?可能か!? 住宅団地の現状と問題点を考える中で、団地の行く末・可能性を模索する
日時:平成17年2月24日(木)~26日(土) 場所:旧日本銀行広島支店

今回の企画の目的は、少子高齢化が進展し、深刻な問題が指摘されている、住宅団地の再生について、単に住宅の建替えにとどまらず、現存する建物(戸建て、集合住宅など)を活用し、従来のコミュニティ、住宅周辺、団地のグリーンや共同利用施設を活かしつつ、再生する方策について提案していこうとしたものである。さらに、行政、大学、企業、市民、NPO、居住者、団体など多様な主体による取り組みの端緒となるよう期待したものである。

1. 展示会/第1回団地再生卒業設計賞広島展

NPO 団地再生研究会・団地再生産業協議会によって、平成16年度に公募し、受賞した作品(パネル、模型等)による展示が行われた。東京、名古屋、大阪に続く国内4カ所目の展示会となった。小雪が舞う厳しい時期であったが、期間中、150人ほどの見学者があった。

併せて、広島工業大学大学院「五日市コイン通り」再生、五日市楽々園の路地の再生、個別更新、広島大学横堀研究



室「東広島市酒蔵地区」の再生資料などの展示が行われた。

2. パネルディスカッション/2月26日(土)13:00~

(1)基調講演:「欧州団地再生事例から考えるストック活用」/大坪明氏(株)アル・アイ・エー大阪支社副支社長)

再生の必要性として、1950年代後半から1960年代ごろを中心に高度経済成長の下に都市へ人口が集中し、その後、2006年頃をピークとして人口が減少し、住宅が過剰となったことが背景である。

ドイツの団地再生事例として、ライネフェルデ南団地、ワイマール北団地、イエーナ・ロペダ西団地、マルツアーン団地、ヘラースドルフ団地などが紹介され、団地再整備の戦略として、以下の6点が示された。

建物を継続的に改善し、維持管理をする。社会構造をミックス化させるため、提供する集合住宅に差異をもたせる。住宅団地を、都市機能を担う一部分として完成させる=都市センターを整備する。居住水準と生活の質を改善する。大規模団地と自然を融合させる。計画プロセスを民主化する。(住民参加型等)

一方、スウェーデンの団地再生の事例として、インスペクトーン団地、ゴードステン団地、ラビ団地が紹介された。

こうした団地の特徴として、「外科的手法より漢方的手法」が都市の更新に必要であること、既にあるものを使いこなすことの重要性が問題提起された。

(2) パネルディスカッション

コーディネーター:石丸紀興氏(広島国際大学)

パネリスト:今井信博氏(株)現代計画研究所)松林俊一氏(高陽ニュータウン住民)間野博氏(県立広島女子大学)横堀肇氏(広島大学)

松林氏:高陽ニュータウンの住民の立場として話したい。家を買うときのひとつのポイントは少年少女時代にどこで育ったかにある(海・山・街中等)。また、「再生」という言葉は機能しなくなったものに対して使う言葉である。現在高齢者が多いからと言ってそう言い切れるのか?さらに、団地の再生は、集合住宅の再生と共に戸建住宅の再生も考慮されるべきである。

今井氏:広島市基町住宅団地について紹介後、東京都百人町、都営大山団地、石川県営平和町団地、御坊市営島団地、広島市営庚午南住宅の事例紹介を行った。

横堀氏:高層住宅団地再生のソフト対応事例を紹介した。そこから、自治会の自主性の尊重の重要性、その意思決定を辛抱強く待つこと、ここという時にサポート(タイミングなど、法律や規則に従うことがすべてではなく、話し合いや自然体のもので大切である。

間野氏:「郊外の戸建住宅団地にはどんな未来があるのか」についての分析を行った。そこで、維持していくためには、公共交通サービスの公共的補償、日用品のデリバリーサービス、地価・中古住宅価格の低減、往診型医療の復活などのアイデアが示された。

(3) まとめ

高齢化に対応することは共通の問題であり、助け合いによりサービス、サポートの充実が求められている。



環境問題との関係が必要で、今ある物をよみがえらせることにより環境と一体化することが期待できる。

趣味を通して、団地内外の友好を深め、コミュニケーションの場を提供し、広げていくことが重要である。

老朽化から考える、すなわち今ある物を活かしたリフォームが重要である。

人口減少に伴うこれからの課題は、増築ではなく減築することにより資産価値を高めることも必要である。

住民側も、整備費用を負担又は家賃が上昇するなど、今後のためにもある程度の金銭負担に耐える必要性がある。

公的な資金をあてにするわけではないが、やはりある程度の援助は必要なのかもしれない。

さまざまな団地がある中で、個性を活かしつつ、団地とのつながりや連携が必要である。

少子化に伴い、人口増加が望めない状況のもとで質的に都市の開発を進めるコンパクトシティが期待される。

(文責:宮本茂)

都市計画サロン

広島市に來られた吉村元男先生を招いて“グリーンコミュニティ”をテーマとする環境計画論、及びその活動をご紹介します。以下にその概要を報告する。

話題提供者：吉村元男氏(鳥取環境大学環境情報学部教授)
(NPO法人鳥取発!エコタウン2020理事長)

日時：2004年3月2日(水曜日)19時~21時

場所：コンフォート広島(広島市中区小町)

参加者数：10名



はじめに

鳥取環境大学は「環境」の名を持つ全国初の大学で、公設民営で運営されている。今年で4年間を終え、初めて社会に卒業生を送り出す。吉村教授は35年間、民間コンサルタントを主宰し、緑に関する都市計画や設計等の活動をされてこられた。大阪万博跡地の緑地設計や大阪梅田のスカイビルの造園設計などが有名である。一方、環境計画では屋久島の森林計画を手始めに、各地のゼロエミッション(地域で排出する各種の廃棄物を地域内で循環させ、ゴミ発生をゼロとする資源・エネルギーの完全循環社会 エコタウン)計画を提唱し、森や森林の復元、エコタウンづくり等の調査計画の第一人者として著名な方である。

テーマ 「私のグリーンコモン論」

(1) ゼロエミッションへ向けて

廃棄物ゼロの資源循環社会は北九州市などの産業都市で進められている。私は「関西学術文化研究都市/40万人」のゼロエミッション社会化を目指して、都市活動と農業活動の循環を計画したものの、大きなニュータウンにおけるエコタウン実現への壁は大変に厚いものだった。

そこで鳥取環境大学に赴任した折、この大学の立地する小さな研究学園都市、津ノ井新都市においてこそ、エコタウンを実現しようと思い、次の2点を目標とした。

大学の授業の中で、ゼロエミッション計画を取り上げ、津ノ井新都市をフィールドとし、大学そのものが事業主体となって実践すること。

コンサルタント等地域外のものが構想・計画するだけでは具体化はしない。運営主体に自らが係わり、またその地域の住民として活動すること。

関西学園都市の苦い経験から、多くの人が生活する大学(=街)が事業主体となり、環境問題を地域社会と共有し、その解決のための行動を起すのである。そのために教員、学生、地域住民、専門家からなるNPO法人を設立し、具体的な社会活動を行っている。鳥取市は20万人都市で、製

(3) グリーンコミュニティの必要性

急速な工業社会化が、大量生産・大量消費・大量廃棄を招き、自然を破壊し、資源を浪費し、地球環境問題を一層深刻にしている。改めて生物や自然の摂理に沿った循環型の社会を構築し、持続可能な社会への基盤整備が不可欠である。この基盤「食とエネルギーの地産地消」が地域社会に根付いた状態を「グリーンコミュニティ」、またその過程を「コミュニティのグリーン化」と呼ぶ。地域社会がグリーンコミュニティへ進化する過程は2ステップである。

1) 第1ステップ：ものづくり段階

エコデザイン、環境配慮型商品の製造・販売段階と、消費者が利用後のリサイクルの段階までで、グリーン商品を巡る生産と個の消費の関係までを言う。

2) 第2ステップ：縁づくり段階

材料やエネルギーの源、例えば水道水の原水、家庭し尿の行く末などの広い循環やシステムのへの配慮と対応段階である。環境問題だけではなく、災害や停電時との緊急事態に自立できる防災的な観点からの対応も必要。これを税金や保険でなく、「地域通貨/エコマネー」として地域内で循環させ、担保していく段階である。

そして、行政主導の環境対策から地域住民が主体となった地域経営、環境コミュニティビジネスが成立して、グリーンサービスが提供され、経済循環が「新しい公共」となって新たな雇用を生み出す社会である。

(4) 具体的な活動を通して

それではグリーンコミュニティ形成への鳥取市での具体的(主体的な)取り組み事例を紹介する。

1) 天ぷら廃油の活用のモビリティ実験

その1; 廃油活用型カーシェアリング

水質汚濁防止、ガソリン(化石燃料)の節約、CO2の削減による温暖化防止、車の共有化による駐車スパー

スの節約・緑化、渋滞緩和と、「一石五鳥」の効果を狙った社会実験。小学生に家庭廃油を回収させ、対価を地域通貨としたグリーンコミュニティ化である。

その2; 地域コミュニティバスの運行

津ノ井新都市(山)から鳥取駅前を抜け、加露(海)を結ぶ(産業用道路を活用した)新たなエコバス「いなばエコリモわいわいGO号」2往復の実験。基本的な仕組みは「その1」と同様で、通勤や通学の公共交通機関というよりは、「沿線地域の資源の活用」と「グリーンコミュニティの創造」に狙いがある。

2) 間伐材ドームの商品化

我が国の森林維持に重要な間伐材利用の促進と商品開発を研究開発中。一辺が2m程度の三角形を材面で接合する半球上ドーム(フラードーム)の新しい工法。公園やイベント等での使用実績を重ね、現在直径15mものを施工実験中である。広く建築や工作物に活用を広めていく予定である。

3) 市民参加の環境配慮型公園の整備・運用

市民参加の公園やビオトープづくりが広まる中、市内中心部の小公園の改修を市民、専門家、行政、大学で行い、ソーラー発電搭載型間伐材ドーム活用やエネルギー循環を実践し、住民が管理に参加している。(太平公園)

4) モネの庭づくり

大学内の「エネルギー自立型のビオトープづくり」の実験を重ねている。風力発電、天ぷら廃油利用発電、貯留雨水循環型のシステムをもつ自然再生の場。(吉村氏が「モネの絵」の睡蓮を浮かぶ水面に周囲の自然が豊かに映りこむ様を見ての「宇宙感」でこの名前がついた)



(5) まとめ

100年前、E.ハワードがロンドンの巨大都市化を阻止するため、緑豊かな田園地域に職住一体型の都市を構想し、その建設を進めた。しかしそのほとんどが巨大ベッタウンと化し、田園都市の理念とはほど遠い結果となっている。20世紀の巨大都市化は進展し、近年ではエコシティ論やコンパクトシティ論が検討されるに至っているものの、どれも21世紀半ばには直面するであろう環境や資源問題についてはさほど取り上げていない。「Think globally, Act locally」を実践しよう。来る100億人地球満員時代を前に、「食とエネルギーの地域循環と自給」を基本とする「新しい都市論」が不可欠である。巨大都市におけるコミュニテ

ィ再生を柱に据えた「グリーンコミュニティ」の建設が急務である。

(6) 質疑応答

吉村先生の熱いお話だけで時間一杯となったが、延長しての熱心な質疑があった。一部のみを掲載する。

Q; いなばのエコバスの設立や運営上の障害と対策は。

A; コミュニティづくりのためのバス運行で、関係主体(利害が反する場合を含む)への利益誘導がポイントである。

Q; 成功事例というのがあるか。

A; 欧州の先進地では、フルツ村、ベクショー市(独)等。デンマークのサムソー島では麦わら発電で化石燃料使用ゼロを実現している。日本と都市構造の違いも大きい。



【感想】

今回のような環境学は、社会の仕組みやつながりを計画・設計する取り組みに加えて、社会での実践なくしては意味が薄く、吉村先生の近年の実践的活動状況がよく理解できたサロンでした。お髭の穏やかな口調にも、太く熱い「信念」を感じ取れ、その姿は「伝道士」を思います。

昨年、国内外で台風・地震・津波の自然大災害が多発し、地球環境問題や生態系の異変、都市生活が被害を増大させている例も少なくありません。(この原稿を書いている最中に福岡玄海沖地震が発生)総論では理解できてはなかなか各論展開や、その実践がなされないのが環境問題ですが、人類存続への本能が反応し、取り組むプロセスに楽しさや目標が共有できれば、身近な小さな単位から行動できるのではないのでしょうか。豊かな自然・生態系を有する稀有な先進国「日本」。故に自然災害の多発地帯でもあるわけですが、グリーンコミュニティ(グリーンシティ)化によって解決できる点は多いようです。後世に残す街は、自然環境と大地の資源が持続する国土が母体でなくてはなりません。現代生活の象徴、「消費」という言葉は、「費やして、消す」と書きますが、それは時間くらいであって、物質世界には当然あり得ないことです。空間づくり、都市づくりに携わる一人として改めて考えます。

(文責: 宮迫勇次)

《お知らせ》: 都市計画サロンのリクエストや、話題人が支部へお越しの際のホット情報はこちらまで。

松波副支部長 メールアドレスは nami@urdi.co.jp
事務局 佐藤俊雄(総務委員長)

編集委員 ホットコーナー ニューヨーク報告

中電技術コンサル株式会社 周藤浩司

毎年繰り返される忙しい年度末を何とか乗り越え、ニューヨークに発ったのは4月2日。成田のトランジットを経て、12時間少々空路は、頭の中を切り替えるには程よい空間であった。ニューヨークの刺激を体感したいと思いつき、家族を伴った旅はこうして始まった。

整然とした街・ニューヨーク

ニューヨークはあいにくの空模様で、私たちを乗せた航空機は、2度目のランディングアプローチで何とかJ.F.ケネディ空港へ着陸した。翌日にヤンキースの開幕戦が予定されているが、ここ数年、開幕戦には必ず雪が降ると聞かされていた。やはりこの時期はまだ真冬並みの寒さだった。土曜日のためクルマが少ないこともあり、マンハッタン島までは30分少々道のりであった。

ニューヨークの街区はとても整然とし、南北を走るアベニューと東西のストリートにそれぞれナンバリングされている。また5thアベニュー(いわゆる五番街)を境にウエストとイーストに分かれている。サインがやや少なめではあるが、分かりやすい街並みである。



ショッピングの中心地、五番街

クルマと公共交通機関

さすがクルマ社会を代表するアメリカ。案の定、市内は慢性的な交通渋滞。マンハッタン島という厄介な地形が市内流入部で渋滞を引き起こす要因ともなっている。また無駄に長いクルマ(リムジン)には驚かされる。これだけで道路の交通容量は随分低下してしまうと考える自分はやはり日本気質であろうか。おまけにドライバー、歩行者ともに交通マナーは悪く、信号無視や駐車違反は日常茶飯事である。クラクションを鳴らすことが習慣になっているのか沿道はとにかく騒々しいが、これも都市の活気象徴と思えば納得もする。



リムジン車両が並ぶ

公共交通機関のサービス水準は高く、市内は地下鉄網とバス網が縦横無尽に張り巡らされ、どこに行くにも不自由はしない。また7\$でUnlimitedのメトロカードさえ買えば、一日中、地下鉄とバスに乗り放題で、ソフト面の整備も進んでいる。ただし時刻表はあるものの、殆どダイヤどおりに来ることは無いので見る人もいない。また地下鉄プラットフォームには電光掲示板が無いいため、地下鉄がいつになれば来るのか知るすべも無く、慣れるまで戸惑うこともしばしばである。ExpressとLocalが分かりにくいものの少々苦労した。こうしてみると我々は親切すぎる日本の公共交通機関の情報提供に慣れてしまいすぎたのかもしれない。一昔前まで怖いといわれていたニューヨークの地下鉄であるが、今はその面影も無く、発車時の急加速を除けば安全な交通機関と言えよう。とはいえ我が娘らは、夜の地下鉄にはやや恐怖感を抱いていたようである。また面倒な時はイエローキャブが便利である。料金も比較的リーズナブルで安心して乗れる。



縦横無尽にネットワークする地下鉄・バス

市民の憩いの場セントラルパーク

マンハッタン島のアップタウン中央部に位置するセントラルパーク。1857年、当時ゴミ捨て場だった土地を世界初の都市公園に変えたのはF・ロウ・オルムステッドとC・ヴォーの二人の建築家だったという。南北4km、東西0.8kmのこの公園は、都会の喧騒の中であって、ニューヨーク市民の憩いの場となっている。リスもたくさん生息しており、旅行者にも寛ぎを与えてくれる。世界4大美術館のひとつメトロポリタン美術館やアメリカ自然史博物館、グッゲンハイム美術館など文化施設も近接し、退屈させないエリアである。氷河時代の名残を伝える岩肌も点在し、古の想いを馳せることもまた楽しい。



セントラルパーク



アメリカ自然史博物館

タイムズスクエアからソーホーへ

マンハッタン中央部、また世界のショービジネスの中心地タイムズスクエア。あふれんばかりの人々やミュージカル目当ての観光客がひしめき合う光景はお馴染みである。我々もご多分に漏れず、ブロードウェイミュージカルを堪能

能したが、舞台と観客席との一体感は感激である。夜遅くまで賑わうニューヨークの顔である。

少しダウントウンに向くとソーホーに辿り着く。今では世界の最新ファッションをリードするブティックなどが建ち並ぶが、古くは産業地区、芸術家の街として栄えた地区である。なかでも「カースト・アイアン(鋳型で作った鉄の骨組み)」という貴重な建築様式が残る歴史保存指定地区でもある。日本とは違い、古い建築物をリニューアルしながら使うため、味わいのある建築物が数多く残されている。



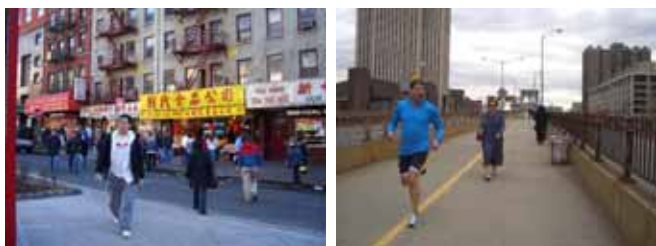
タイムズスクエア

SOHO

チャイナタウンからブルックリン・ブリッジへ

ソーホーから地下鉄で一駅南下すると、チャイナタウンに入る。イギリスの建築様式を受け継いでいるソーホーの街並みのすぐ隣はまさに中国である。相変わらず活気とパワーが漲っているが、やはりここでお奨めはチャイニーズレストランであろう。我々もニューヨークで食した最も美味な食事は、チャイナタウンで経験した。

ここからさらに地下鉄で一駅南下すると、市庁舎に降り立つ。振り返ると、その正面にはブルックリン・ブリッジが(延長2066m、1883年)聳え立つ。この橋は映画の撮影でも良く使われているが、マンハッタンとブルックリンの間に最初に架けられたネオ・ゴシック様式の2層構造アーチ橋である。上層部が歩行者と自転車の専用空間で、ウォーキングやランニングする人も多い。渡河部になると歩道舗装がコンクリートからボードデッキに変わり、景観的にも歩いて柔らかい印象を与えるが、ボードの隙間から遙か下が見えるのは決して快適とはいえない。



チャイナタウン

ブルックリン・ブリッジ

そしてグランドゼロ

2001年9月11日。世界中を震撼させたあの瞬間は、未だ記憶に新しい。日系建築家ヤマサキ・ミノルが設計した2棟の世界トレードセンターは、一瞬にして僅か28年の歴史に幕を閉じた。訪れてみるとテロ直後の面影は無く、唯一崩れた鉄骨で形づくられた十字架が当時の悲惨さを物語っているように見えた。今回の旅の大きな目的の一つがこの地であったが、辺りは既に復活への息吹が漲っていた。

跡地には、議論の末に選定された「フリーダムタワー」が、ワールド・トレード・センターを超える世界一の高層ビルとして2008年には完成するという。不屈の精神のもと、テロからの脅威にも負けない、自由と民主主義のアイコン的建築物は自由の女神を彷彿させるように設計されている。アメリカの力強さを感じる瞬間だった。

この地の直ぐ近くにはイサム・ノグチのデザインによる「レッド・キューブ」が街角を飾っている。広島とのゆかりの深いノグチ氏の現代アートは、平和への祈りを捧げているようにも見えた。数年後、このダウントウンの地は大きな変貌を遂げているであろう。この街の真っ只中に聳える新しいニューヨークのシンボル・フリーダムタワーにいつか再び訪れる機会を持ちたい。



グランドゼロ



フリーダムタワーの案内



レッド・キューブ(イサム・ノグチ)



ウォール街の街並み

ニューヨーク滞在は僅か3日間であったが、期待を上回るインパクトを体感することができた。家内と二人の娘、家族として初めての海外であったが、彼女たちも何か感じるものがあったであろう。

例年、4月第1日曜日からサマータイムが始まる。我々はその瞬間を体験することができた(その代償として1時間だけニューヨークの滞在時間を損してしまったが)。またその日は松井が大活躍したヤンキースの開幕戦があった。残念ながら通常の20倍というプレミアチケットの価格と半端でない寒さのため観戦は断念した。日本では松井の活躍が大きく報道されていたようであるが、現地の新聞では松井の成績を探すのに苦慮した。そもそも新聞紙上はヨハネ・パウロ二世のニュースで埋め尽くされていたのだが。

ヤンキーススタジアムには行けなかったが、ハドソン川のナイトクルージング、エンパイアステートビルからのニューヨークの夜景を満喫することができた。

ニューヨーク、元気の出る街である。

(文責：周藤浩司)

会員紹介

奥村誠(おくむらまこと)

広島大学大学院工学研究科
社会環境システム専攻助教授



1962 年京都市生まれ / 1984 年京都大学工学部交通土木工学科卒業 / 1986 年同大学院修士課程修了 / 1987 年京都大学工学部助手 / 1991 年京都大学博士(工学)取得 / 1992 年京都大学工学部講師、ボストン大学エネルギー環境研究所客員研究員 / 1995 年広島大学工学部助教授 / 2001 年から現職 / 2001 年 JICA 都市交通人材開発プロジェクト・リーダー(ブラジリア大学都市交通人材養成センター)

1. 最近の研究

地域の政策立案をより科学的に進めるために、社会経済現象を定量的に把握してモデル化し、数値実験等でその挙動を明らかにする研究を実施してきました。ただし、関西で言う「一丁囃み」の性格が災いして、面白そうなことには何にでも首を突っ込むため、研究分野は散乱しています。

近年の主な興味は、(1)IT化の進展による都市間交通の代替可能性とその国土構造への影響、(2)航空・鉄道の連携利用に対応するサービス、(3)自動観測交通量等の不完全観測データの活用手法、(4)郊外住宅地の人口動態と今後の生き残り策などで、これらを(1)統計モデル、(2)最適制御、(3)逆解析手法、(4)遺伝的アルゴリズム、(5)地理情報システム、などの手法を組み合わせて分析しています。

<http://trip.cee.hiroshima-u.ac.jp/okumura.html>)

に研究動向の紹介や発表論文一覧(pdf付)を載せています。

2. アピールを2つ

杉恵頼寧先生と私の研究室にはM2:5名、M1:4名、4年生:7名の合計16名の学生がいます。地域の委員会や学会活動で得た情報を紹介して学生自身に考えてもらうため、平日は8:30から25分間の「朝の会」を開いています。朝には弱い私ですが、何とか3年目に突入しています。

また、GISと併せて利用できる地域メッシュ統計データを買いためてきました。中国地方5県の国勢調査、事業所統計、商業統計、工業統計がそろいましたので、大学内部での共同利用や分析結果の支部発表会での報告、地図のWebでの公開を行っています。なお本年8月20日(土)に「郊外住宅地の人口構造の推移と都市サービスに関する共同研究」の報告会を広島市内で行う予定です。

3. 都市計画学会とのかかわり

どの学会で活動するかは悩ましい判断です。2、3月には花粉症で苦しんでいるところに多額の会費請求が届きます。我々の世代は上下と比べると数が少なく、学会の仕事も多く回ってきます。都市計画学会でも2年前から学術委員として論文審査に関わっています。おかげ様で都市間交通を研究する上での実体験とマイレージはたまりますが・・・。

一方当学会の支部活動が盛んですので、大変楽しませていただいています。(最近も学会誌253号の支部のページに、自分の写真が載っていることに驚きました！)

前田眞(まえだまこと)有限会社邑都計画研究所代表取締役
行政参加型まちづくりの実現に向けて

愛媛県松山市を中心に活動しております。広島工業大学地井研究室を卒業して、広島市で中国地方を中心とした都市計画(土地利用)等に関する調査業務に係って来ました。その後、平成4年に独立開業し愛媛県松山市で愛媛県を中心に細々とコンサルタント業を開業しております。最近の活動フィールドを振り返ってみると、行政との付き合いから地元住民の方々や市民活動をされているNPOやボランティアグループとの付き合いに移ってきていることに気がつきました。

最近、阪神淡路大震災以降、身近な生活の支え合いの再構築ということに着目される方が多くなり、社会福祉協議会を中心とした住民活動起こしに対する支援活動です。この活動は、地域住民間の話し合いになかで、自らが目標を設定し、さらに目標実現に向けてできるところからの事業化までに亘っています。

愛媛県北宇和島郡津島町岩松地区では、地域の生活改善にかかわるニーズ把握、それらへの対応策の検討までを住民が主体となって取り組んでいます。そこで設定された商店街の空き店舗を活用した住民の溜まり場づくりという目標の実現に当たって、住民の自主運営を基本としながら、行政の支援を導入することによって実現化しました。さらに、それを契機として地区の支え合いの仕組みを盛り込んだ計画づくりにまで発展しています。また、この動きが他の地区にも派生し、各地区での住民主体の活動が具体化してきています。

また、都市再生に係わる市民活動支援にかかわっています。それは、中心市街地や商店街等の活動支援であったり、地域資源を活用することを目的としたNPO活動の支援であったりします。松山市で全国的に注目を浴びている坂の上の雲のまちづくりにおいては、フィールドミュージアムづくりがひとつの目的となっています。この構想の具体化にあたって、市内に散在している様々な歴史的資産を市民活動の中で再発見、再評価していく活動が必要であり、その動きを行政でサポートしようという事業を実施しており、私もサポート役としてかかわっています。この3月には、インドネシアのジョグジャカルタ市で行われた東京大学とインドネシア・ジャガマダ大学との共同研究事業のワークショップに参加して、これらの活動の様子をレポートする機会に恵まれ、現地のスタディツアー等、いい勉強をさせていただきました。住民による地域ニーズの把握や地域課題の共有、合意形成の仕組みの再構築などを進めるためには、ワークショップ等を通じたコミュニケーション能力の向上が不可欠だと感じています。住民主体のまちづくり活動の実現のため少しでも応援ができればと日々活動しています。



ワークショップ(インドネシア・ジョグジャカルタ市)での発表の様子

今後の活動計画

編集後記

<第3回支部通常総会、第3回支部研究発表会>

5月28日(土)に、第3回支部通常総会が開催されます。同時に開催されます第3回支部研究発表会では、招待講演2名(間野博広島県立大学教授、戸田常一広島大学大学院教授)、研究発表10名の方が予定されています。皆さま奮ってご参加下さい。

なお、後日、案内状をお送りし、その後資料も事前送付の予定です。

支部総会

日時:平成17(2005)年5月28日(土) 13:20~13:50

会場:広島市まちづくり市民交流プラザ

研究発表会

日時:平成17(2005)年5月28日(土)

午前の部 10:15~12:00 招待講演・研究発表会

会場:法華クラブ10Fリンデンバウム

午後の部 14:00~17:30 研究発表会

会場:広島市まちづくり市民交流プラザ(支部総会と同じ会場)

午前と午後で会場が異なりますが、200m程度の距離です。

18:00から懇親会を法華クラブで開催します。

<「ヘンリー・サノフ講演会」(仮)>

日時:平成17(2005)年5月29日(日) 午後

会場:広島市まちづくり市民交流プラザ

主催:実行委員会形式

新年度を迎え、ようやく暖かくなってきたかと思う間もなく、初夏の陽気を感じる季節になりました。季節が駆け足で都市の装いを変えて行きます。本支部に所属する会員の顔ぶれも少し変わったのかもしれませんが。

昨年度、ご縁があって何回か四国に行く機会がありました。四国には、お遍路さんが訪れる札所が市街地内や山間部などに点在し、お遍路さんやお遍路さんのための休息施設など、独特のまちの装いが見られます。その一方で、国道沿いなどには郊外型の沿道サービス施設も立地し、無性格な市街地も一部で目に付きます。

香川県では、昨年5月、県内全域にわたって都市計画区域の線引きを廃止しました。この背景には、生活圏が拡大する中で、線引き都市が非線引き都市や都市計画区域外に活力を吸収されてしまうことに対する強い危機感があったようです。非線引きにした市町では、無個性な都市の形成を助長しないよう、特定用途制限地域の指定を行っていますが、市町村によって規制内容にばらつきが見られます。

四国に限ったことではありませんが、都市が秩序を維持し、成長を続けるためには、郊外開発の規制だけでは十分ではありません。都市の顔となる中心市街地の再生ための取り組みが必要です。しかし、中心市街地の再生は、郊外開発以上に多くのエネルギーを要します。都市間競争の名の元に市町が安易なまちづくりに走らないためにも、広域的観点から中心市街地の再生を支える仕組みが必要ではないでしょうか。

しかし、その前に『中心市街地の再生が本当に社会的に合意されているのか』について、改めて考える必要があるのかも知れません。(編集長:佐伯達郎)

善通寺市の中心部にある
総本山善通寺(五重塔)



金刀比羅宮本殿からの眺望(左前方が讃岐富士:飯野山)

編集委員:佐伯達郎(編集長)、上之博文、佐藤俊雄、周藤浩司、隅田誠、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也